

眉山編。文化八年京菊屋太兵衛板。巻頭に秋の坊月次會の歌仙があつて、それに添へた北枝の文に『秋の坊の月次うつし進候。あらましかやうを好候。安宅の浦の草臥折々おもひ出し候。』とあるから題號を探る。その他編者風友の句どもを集めてある。

アタカジヨウ 安宅城 源平盛衰記壽永二年五月二日平家加賀に進入の條に『林・富樫・下田・倉光も大勢に被蒐立て安宅城をも引退く。』とある。越登賀三州志故墟考には、この城跡は詳かでない。按ずるに只嶮に憑つて拒柵を造つたのであらうと言つてゐる。

アタカシン 安宅新 能美郡粟津郷に屬する部落。元祿の加越能産物書上には、この地に二個の楯笠があつたことを記し、寶曆の調書にも尙それが見える。

アタカノセキ 安宅ノ關 (一)關の有無—安宅の關は、義經通過のことによつて最も世に知られてゐる。しかし富樫泰家のこゝに關を設けたといふは、全然架空の談に外ならぬ。或は八雲御抄に安宅の關を載せてあるといふものもあるが、同書のは安宅の橋であつて關ではない。更に安宅の關址の遠く海中に没したことを説くものもあるが、それにも何等の據がない。しかし、この説は全く今人の捏造でもなく、藩政時代に成つた三州名跡志に、關址既に海岸を去ること二三里の海中に沈んで、百年前までは枯橋せる松樹を水底に望み得たと記してあるから、當時既にかゝる俗説があつたものと見える。この海岸一帯の後退することは事實であるが、安宅にして數里の陸地を失つたとすれば、その南北接續の海岸も略同一の状態であらねばならぬ。然る

に獨安宅にのみこの口碑あるは怪しむべきである。加賀志微にいふ。安宅の關のことは論曲に作りたる故人口に膾炙するが、古書には見えぬ。義經記には、越前三口に敦賀兵衛・井上左衛門が關を構へて守護したるを、義經一行が欺き通つたとはあるが、安宅關のことはない。盛長私記には書かれてゐるが、この書は享保中加藤仙庵の偽作だといふから據にはし得ぬと。

(二)後太平記の虚妄—後太平記は元祿五年多良南宗庵の著であるから證とすべくもないが、その中に『新田一族關東横行、安宅關被破事。』の一條があつて、『北陸道加賀國安宅の關は、右大將頼朝文治年中被立置より以來、終に鎮を開く事なし。去る元亨元年五畿七道四境の新關を被停止時、此關をば不開。富樫介是を守護して、究竟の關守五十餘騎を居置ける。』といひ、應安元年五月新田義宗等上野に敗戦した後、山伏に扮装して此の關門を突破し、再び越後に下つたことを載せてゐる。これ地理上北陸道を経過するの理由を見ぬのみならず、義宗の兵を擧げたのは此の年七月で、彼は上杉憲將と戦つて敗れたのである。然らば五月にこの事のある筈がない。況や叙述の體、義經過關の談を模倣したこと歴然たるものがあるではないか。

アタカノハシ 安宅ノ橋 能美郡に在つた。八雲御抄に『あたかの橋、加賀』とある。保曆間記壽永二年六月二日に、『平家安高橋を引て人馬の氣をつがせける。源氏押寄たりけれども橋はひかれたり。』とも見える。

アタカノマツバラ 安宅ノ松原 能美郡に在つた。源平盛衰記壽永二年に、『去四月下旬

には平家十萬餘騎なりしに、燧・長畝・三條野・重松・楳嶽・須川山・長並・一松・安宅ノ松原云々、所々の合戦に亡つ、七萬餘騎は失にけり。』とある。

アタカノミナト 安宅ノ湊 能美郡に在る。源平盛衰記に、『源氏は安宅湊より落て、今湊・藤塚・小河湊・倉部・雙河打過て大野庄に陣を取。』と見える。この安宅湊は安宅川右岸の河口で、安宅湊に濱した今の安宅の部落をいふのである。

アタカノワタシ 安宅ノ渡 能美郡に屬する。源平時代に在つて、北陸道が安宅川を横ぎる地點をいうた。

アタゴザカ 愛宕坂 金澤にあつて、今の八幡町から明王院の別當する山上愛宕社に登る急峻の石階をいうた。明治六年社殿・石階共に廢した。

アタゴジ 愛宕寺 鹿島郡小島にあつた眞言宗寺院。もと七尾に在つたが、前田利家の在城するに及んでこゝに移された。明治維新の際寺僧は復飾して舟木隆之介といひ、阿當護社に神勤することになつた。

アタゴシタマチ 愛宕下町 ↓アタゴマチ 愛宕町。

アタゴシヤ 愛宕社 ↓ミヨウオウイン 明王院(金澤)。

アタゴマチ 愛宕町 金澤の町名。元祿以前から愛宕下町或は茶屋町と呼んだが、藩末の頃には卯辰京町・中町・老松町・宮川町に分ち、明治四年四月戸籍編成の際から愛宕一番丁・二番丁・三番丁・四番丁となつてゐる。もと附近の山上に愛宕社があつたので、この名を得たものである。

アタゴモンゼン 愛宕門前 金澤の舊町名。明王院門前ともいひ、愛宕山の下で、もと愛宕社の門前地であつた。今は八幡町の一部である。

アタゴヤマ 愛宕山 もと金澤明王院の別當する愛宕社附近一帯の卯辰山の一部をいうたが、元和二年觀音院が創設せられてから、その地を觀音山といひ、愛宕山の名によつて示される區劃は非常に縮小した。

アダチゴチク 足立五竹 金澤の俳人。希因門五哲の一人で、後江戸に移り案山子と號した。天明の頃には京にみたらしい。このてがしはの著がある。

アダチヒロカタ 安達寛葉 通稱幸之助。藩士辻平之丞の臣中宮五左衛門の第二子である。天保中足輕安達六郎に養はれてその家を襲ぎ、安政三年足輕小頭と爲り、尋いで江戸に赴きて西洋兵學を村田藏六に受け、刻苦精勵遂にその塾頭となつた。文久元年藩に歸り、歩士に進み、壯猶館の教師に任ぜられ、慶應三年更に新番となり、明治元年藩命によつて京に上り、藏六に會した。藏六時に大村益次郎と稱して征東軍の參謀となり、將に出發せんとする際であつたが、寛葉を薦めて伏見兵學校の教官たらしめた。東北鎮定の後益次郎京に歸つて展寛葉と三條木屋町に會し事を議したが、二年九月四日夜賊闖入して直に益次郎を倒し、寛葉も亦闘つて斃れた。時に年四十六。大正四年十一月十日特旨を以て正五位を追贈せられた。

アダチャヘエ 安達彌兵衛 元和六年前田利常に仕へ、初めて五百石を領し、寛永十六年歿。子孫相續いで藩に仕へた。